

なぜ、教育と生活支援の連携強化が求められるのか —支援ニーズの実証分析から—

松塚 ゆかり（大学教育研究開発センター）

要約：

学生生活実態調査の分析により、悩みを自覚した上で、その解決策として学生支援の必要性を認識し、実際にその支援を利用することができている学生がいる一方、悩みを内包しつつもこれを自覚せず、支援の必要性を認識していない学生が少なくないことが確認された。また、学生の悩みは勉学に関するもの、人間関係に関するものなど、ある程度パターン化できるものの、それらの悩みは複雑に交差しており、その表出のあり方も多様であることが分かった。真に問題を抱える学生は「見えにくい」のであり、その問題の深度も単一のものさしで測ることができない。これに対応するには、学生相談窓口やアンケートなどの学生自らが意思表示をする「場」に加え、学生の問題を客観的に察知できる接点が必要となる。直接的接点には、クラス担任やゼミ教員、ピアサポートなどを通じた交流の場があり、間接的接点としては学生の履修状況や成績変動など学修データを分析する場がある。生活支援の場、教育の場、課外交流の場、データ分析の場のいずれかで示された「サイン」を受け止め、「場」同士の連携を密に保つことにより、適切かつ敏速な対応を講ずることが学修・生活支援の新たな一歩であると考えられる。

1. はじめに

教育から生活、就職面まで多面的に学生のニーズを把握し、ホリスティックな支援体制を整備することが、教育の効果を高め、充実した学生生活を可能とすることは、米国を中心とした高等教育先進国における研究で実証されている（Carranza and Ender 2003, Cuseo 2003, Kramer 2003, Stoecker 1988）。近年日本においても、大学生の学習不適応に加え、人間関係や社会生活における適応困難が問題とされている中、教育面での指導に人格形成や生活指導・支援をいかに連動させるかが重要な課題となっている（谷島 2005）。また、それらの支援には教員や学生相談室、保健センターなどがネットワークを組み、多方面からの組織的アプローチが必要であることが指摘されている（喜田・高木 2001）。

事実、岩手大学の大学教育総合センターや三重大学の学生総合支援センターのように教育面での支援と生活面そして就職関連の支援を統合し、入口から出口まで、すなわち、「入試から教育、学生指導、課外活動、就職までを相互に結び付け、総合的に教育や生活支援¹」を実践している例がある。また、今後の大学教育は、中教審が定義したいわゆる「学士力」を養成することが期待されると考えられるが、「学士力」として定義される能力は特定の専門知識や技能ではなく、理解力、思考力、情報活用力、

¹ 岩手大学・大学教育総合センターのサイト <http://uec.iwate-u.ac.jp/> を参照されたい。

倫理感、チームワーク力、問題解決力など、「生活力」とも言えるコンピテンシーを伴うものである。これらの「力」を育成するのであれば、学修と生活の両面から学生を支え導く教育体制が求められる。

本稿は2007年度に実施された学生生活実態調査の結果をもとに、教育・生活支援の利用状況やニーズを分析し、支援体制のあり方を考える上での基礎材料を提供することを目的としている。学生の学習や教育支援、生活支援に関する考えを把握するとともに、それらの支援がどのように学生の悩みに対応しているのかを検討する。また、学生の悩みはどのような性質を有するのか。勉学上の悩み、生活の悩み、就職の悩み、人間関係に関する悩みなど様々な悩みがある中、それぞれの悩みはどのような性質を有し、どのように相互に関連し合い、どのようなかたちで表出するのか。さらに、悩みを持っていても、本人が自覚していない場合、もしくは悩みが表出していない場合はどのようなかたちでそれを察知すればよいのか。そして、これら全ての問題を前に、大学はどのような体制を以って学生と向き合っていけばよいのかを計量的分析を通して検討する。

2. 検討の枠組み

本学では2005年度に学部生を対象に、そして2007年度には学部生と大学院生を対象に、学生委員会並びに学生支援センターが学生生活実態調査を実施した²。これらは学生の生活状況を把握することにより、学生支援の在り方を検討することを目的とするものである。本稿では2007年度の調査データをもとに、教育・生活支援の利用状況と学生が抱える悩みに焦点をあて、以下の項目を明らかにする。

- ① 学生の支援利用の在り方と必要性の認識
- ② 学生支援の利用度と必要性の認識が、学生の抱える悩みとどのように対応しているのか
- ③ 悩みの複雑性と相互関連
- ④ 悩みの内在性

悩みの実態、悩みに対する学生自身の向き合い方、対応策としての学内支援利用の実態を具体的に把握することにより、教育・生活支援体制の在り方をより発展的に探るものである。検討の対象となる教育・生活支援は、本学の主要学生支援組織・制度であるキャリア支援室、保健センター、学生相談室、クラス担任制度、そして留学生相談室である。

2007年度の調査は11月から12月にかけて実施された³。質問項目は、性別や学部、学年など学生の属性に関する項目、世帯収入や所在地を含む学生の家庭環境に関わる項目、学生自身の生活費や支出内容を問うもの、奨学金授与状況など経済状況に関する質問、進路や就職に関する質問、大学が提供する学修・生活支援に関する質問、学生生活の目的や満足度、問題や悩みなど学生生活全般に関する質問など多岐に渡る。このうち本稿では、進路や就職、学修・生活支援、そして学生生活についてのデータを抽出し分析を行うとともに、学生の属性などをコントロールし、分析の信頼性を高めたい。

² 「一橋大学学生生活実態調査」の包括的報告書は、<http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2007/0329.pdf>を参照されたい。

³ 学士課程の回答率は21.8%。学部別回答率は、商学部18.94%、経済学部18.40%、法学部25.76%、社会学部23.92%。

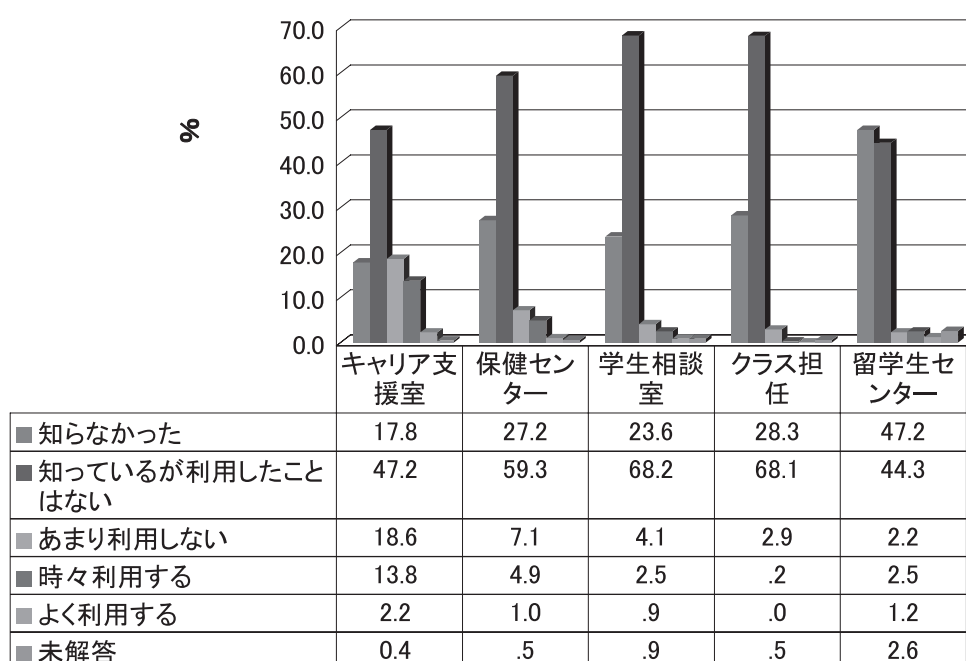
3. 分析

1) 生活・教育支援の利用度、必要性の認識、学生の悩み ― 概観

① 支援の利用状況と必要性の認識

学内で実施されているキャリア支援室、保健センター、学生相談室、クラス担任、留学生相談室での支援をどれくらい利用しているかを尋ねる質問がある。ここでは、a) キャリア支援室における情報提供とアドバイス、b) 保健センターにおけるメンタルヘルスなどの相談、c) 学生相談室での個人相談、d) クラス担任との相談、e) 留学生相談室の留学生や留学のための相談についてその利用状況を見る。各支援について、学生は「知らなかった」「知っているが利用したことはない」「あまり利用しない」「時々利用する」「よく利用する」から選択した。表1ではその結果を全体を100としたパーセンテージで表すとともに、それに対応する棒グラフを示している⁴。

表1 学生支援利用状況



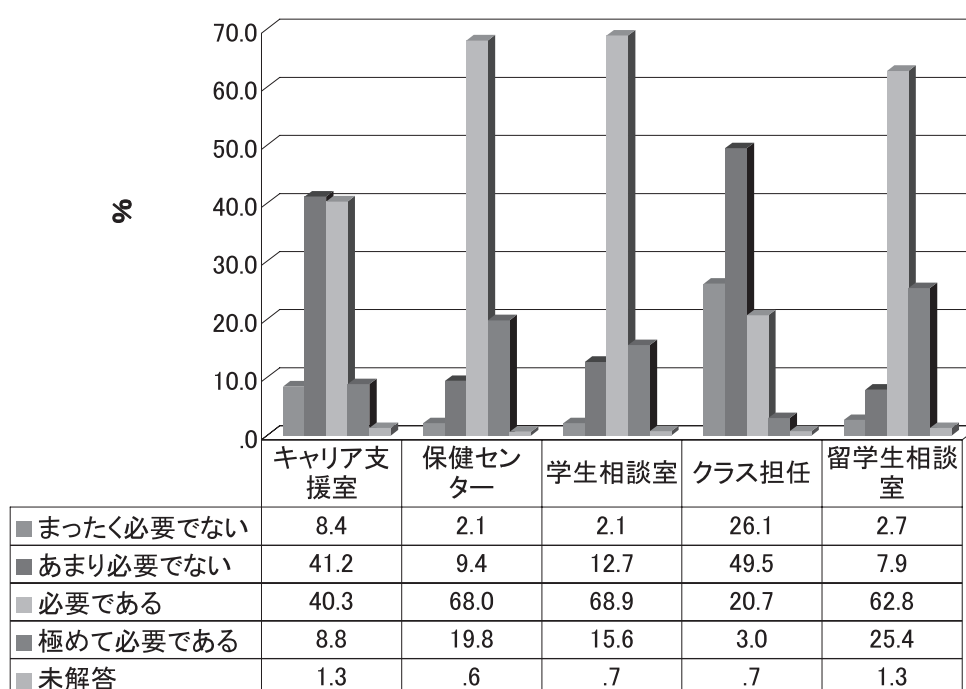
キャリア支援室、保健センター、学生相談室、クラス担任については「知っているが利用したことはない」が最も多く、留学生センターについては「知らなかった」が最も多い。「利用状況」という観点から考えると、「知らなかった」と「知っているが利用したことはない」と回答した学生が利用した経験がないと判断でき、そのように答えた学生はキャリア支援で65%、保健センターで86.5%、学生相談室で91.8%、クラス担任の場合は96.4%、留学生センターで91.5%となっている。むしろこれらの支援を知らなかった、もしくは知っているが利用しなかったことに問題があるわけではなく、「知る必要が無かった」または知っているが「支援を受ける必要が無かった」とも考えられ、学生が

⁴ 実数は、学生支援利用状況については添付表1に、学生支援の必要性については添付表2に示している。

これまでこれら支援の対象となる状況になかったか、もしくはそのような状況にあっても、友人や家族その他学外の何らかのつながりを通して解決できていたことが考えられる。

それでは、これら各支援について学生はどのようにその必要性を認識しているのでしょうか。同じくキャリア支援室、保健センター、学生相談室、クラス担任、留学生相談室での支援について、学生は「全く必要ではない」、「あまり必要ではない」、「必要である」、「極めて必要である」から選択している。キャリア支援室については、利用に関する設問にあった「情報提供とアドバイス」について必要性を問う質問が無かったため、「入学時からのキャリア形成のためのプログラム」の必要性を問うた結果を用いている。

表2 学生支援必要性の認識



「必要である」もしくは「極めて必要である」と答えた学生は、キャリア支援室が提供するプログラムでは49.1%、保健センターにおけるメンタルヘルス関連の相談では87.6%、学生相談室の個人相談については、84.5%、クラス担任については33.7%、留学生相談室の留学生や留学のための相談については88.2%となっており、保健センター、学生相談室、留学生相談室における生活支援に対する必要性の認識が特に高いことがわかる。

必要性の認識度と利用度の関連はどうであろうか。即ち、必要性を認識しているが故に利用しているのだろうか、また必要と感じながら利用していない場合などはあるのだろうか。各学生支援の理由について、「よく利用する」「時々利用する」と答えた学生を「利用する」グループとし、「利用したことはない」「あまり利用しない」と答えた学生を「利用しない」グループとし、「知らなかった」と答えた学生も一つのグループとする。必要性の感じ方については、「極めて必要である」もしくは「必要である」と答えた学生を一グループ、「全く必要ではない」あるいは「あまり必要ではない」と答

えた学生を「必要ではない」と感じる学生としてグループ分けしている。即ち、各種支援： $S_{1\sim 5}$ [S_1 =キャリア支援、 S_2 =保健カウンセリング、 S_3 =学生相談、 S_4 =クラス担任との相談、 S_5 =留学生相談] を、

a) 必要であると認識する場合並びに b) 利用する場合を、

$$a) S_{1\sim 5} = \begin{cases} 1 & \text{学生}_i \text{が必要とする場合} \\ 0 & \text{学生}_i \text{が必要でないとする場合} \end{cases}$$

$$b) S_{1\sim 5} = \begin{cases} 1 & \text{学生}_i \text{が利用する場合} \\ 0 & \text{学生}_i \text{が利用しない場合} \end{cases}$$

とダミー変換し、a) と b) の相関をとった結果が表3である。上から、キャリア支援、保健カウンセリング、学生相談、クラス担任との相談、留学生相談それぞれについて、「必要である」もしくは「必要でない」と答えた学生が、利用しているか、利用していないか、もしくは知らなかったか、を示す。

まず統計的に有意な結果が多く見られる保健カウンセリングについてみる。保健カウンセリングを利用する学生と保健カウンセリングを必要と考える学生との間には正の相関がみられると同時に、利用すると答えた学生と必要はないと答えた学生の間には負の相関が見られる。そして保健カウンセリングを利用しない学生と必要であるとする学生に正の相関、利用しないと答えた場合と必要はないと答えた場合に負の相関がある。このことは保健カウンセリングを利用した学生、しない学生共に、保健カウンセリングは必要である、と考えていることを意味する。有意性の程度は異なるものの、学生相談、クラス担任との相談、留学生相談、そしてキャリア支援に関しても同様のことがいえる。一方、それぞれの学生支援を「知らなかった」と回答した学生は、必要であるとする場合と負の関係、必要ないとする場合と正の関係を示しており、支援について知らない学生は、そのような支援は必要ないと考えており、無関心であることが必要性の認識に係わっていると言える。

② 支援利用と学生が抱える悩みとの関連性

それでは各学生支援サービスの利用度と学生が抱える悩みとの間にはどのような関係があるのだろうか。即ち、a) ある一定の悩みを持つ学生が、b) その悩みを解決するための支援を利用しているのかを検討してみたい。

設問の中、ここ1年間の悩みを訊ねる項目がある。回答者は、「自分の性格」、「メンタルヘルス」、「学生同士の関係」、「課外活動」、「アルバイト」、「教員との関係」、「家族との関係」、「恋愛」、「授業・試験・レポート」、「研究・論文」、「外国語の学習」、「履修・単位」、「休学・退学・転学部」、「留学」、「進路・就職」、「生活」、「経済的な問題」、「その他」、から自分の悩みとして該当する項目全てを選ぶよう求められている。ここではこれらの悩みを持つ学生が、キャリア支援室、保健センター、学生相談室、クラス担任、留学生相談室それぞれが提供する支援を利用しているかどうかをしてみる。上で定義した支援を「利用する」場合と「利用しない」場合を $\{1, 0\}$ のダミー変数として、これらのどちらかを取る場合を「悩みの内容」で回帰する。モデルは、

表3 必要性と利用度の関係

		利用する	利用しない	知らなかった
キャリア支援				
必要である	Pearson の相関係数	.048	-.015	-.023
	有意確率 (両側)	.140	.656	.487
	N	938	938	938
必要ない	Pearson の相関係数	-.037	.019	.023
	有意確率 (両側)	.258	.570	.473
	N	938	938	938
保健カウンセリング				
必要である	Pearson の相関係数	.093**	.088**	-.117**
	有意確率 (両側)	.004	.007	.000
	N	938	938	938
必要ない	Pearson の相関係数	-.090**	-.069*	.125**
	有意確率 (両側)	.006	.035	.000
	N	938	938	938
学生相談				
必要である	Pearson の相関係数	.063	.141**	-.150**
	有意確率 (両側)	.054	.000	.000
	N	938	938	938
必要ない	Pearson の相関係数	-.060	-.124**	.157**
	有意確率 (両側)	.065	.000	.000
	N	938	938	938
クラス担任との相談				
必要である	Pearson の相関係数	.083*	.107**	-.110**
	有意確率 (両側)	.011	.001	.001
	N	938	938	938
必要ない	Pearson の相関係数	-.081*	-.084**	.109**
	有意確率 (両側)	.013	.010	.001
	N	938	938	938
留学生相談				
必要である	Pearson の相関係数	.036	.091**	-.083*
	有意確率 (両側)	.274	.005	.011
	N	938	938	938
必要ない	Pearson の相関係数	-.052	-.029	.060
	有意確率 (両側)	.111	.377	.065
	N	938	938	938

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

* . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)。

$$P_i = F(Z_i) = \alpha + \beta \text{ 悩み } i + \chi PC_i + \varepsilon_i$$

即ち、観測対象“Z”の分布関数“F”が {0, 1} の値を取り、これを、個々の学生の悩みで回帰する。“悩み”は、「自分の性格」、「メンタルヘルス」、「学生同士の関係」、「課外活動」、「アルバイト」、「教員との関係」、「家族との関係」、「恋愛」、「授業・試験・レポート」、「研究・論文」、「外国語の学習」、

「履修・単位」、「休学・退学・転学部」、「留学」、「進路・就職」、「生活」、「経済的な問題」それぞれについて悩んだと答えている場合と、答えていない場合をそれぞれ $\{1, 0\}$ のダミー変数としている。“PC” はコントロール変数として使用する個々の学生の属性（学年、学部、性別など）である。 ε_i は誤差項。表4が回帰の結果である。

まず、キャリアプログラムから、統計的に優位な結果に注目すると、研究や論文に関し悩む学生、進路や就職について悩む学生がキャリア支援プログラムを利用している。アルバイトで悩みを持つ学生がキャリア支援を利用しない傾向にあるのは、アルバイトとキャリア形成とは代替関係にあるからなのだろうか。保健センターでのコンサルティングについては、メンタルヘルスや家族との関係に悩む学生が利用しており、自身が抱える問題を認識しつつ、その打開策を求めている姿がうかがわれる。一方、アルバイトで悩みを持つ学生はキャリア支援と同様、保健センターでのコンサルティングも利用しない傾向にあり、学外での生活に重きがある学生は学内の支援を活用しない傾向が垣間見られる。

学生相談室の個人相談についても、メンタルヘルスに悩む学生が利用している。また休学、退学、転学部などについて悩む学生も学生相談室の個人相談を利用している。生活、教育両分野での悩みの解決策を学生相談室に求めている様子が見え、同部門では教育から健康面をカバーする幅広い態勢を保持してはならないことが示唆される。クラス担任については経済的な悩みがある学生が相談している、と答えているが、クラス担任に相談する学生自体が極めて少ないため、有意性の高さを示す有効性は低い。また有意性は低いものの、他の支援利用と比較し、授業や試験、レポートで悩む学生がクラス担任との相談機会を利用する傾向を見せているのは妥当であると思われる。

留学生相談については、留学について悩む学生が、きわめて自然に留学生相談を利用している。その他、教員との関係に悩む学生、生活について悩む学生、経済的な問題で悩む学生が留学生相談を利用している。国外に目を向ける学生の意向が現在の教員との問題や現在の生活に関する悩みから引き起こされたものなのだろうか。また留学を望むものの、それに伴う経済的資源に関する問題を抱える学生像も浮かんでくる。これらの詳細を明らかにするには、インタビューなどを通じた定性的情報収集が必要であろう。

コントロール変数として学部、学年、性別を加えたが、これらの悩みと学生支援との関連性に大きな変化は見られなかった（添付表3を参照）。学年効果として、4学年在籍の学生が保健カウンセリング並びに学生相談をより利用する傾向にあること、留学生相談については3学年において利用する傾向が高いことなどを付記したい。

ここまでの分析で明らかになったのは、どの学生支援についても、利用する学生、しない学生ともに、必要であると感じていること。特に学生支援を利用している学生に関しては、それぞれが抱える悩みと支援の内容が概ね対応しており、このことは、自身が抱える悩みを自覚し、これに対応する学生支援の必要性を認識し、実際にその支援を利用する、という適切なロジックに即して行動していることを意味する。

表4 悩みと支援利用との関係

	キャリア支援プログラム		保健コンサルティング		学生相談室 個人相談		クラス担任 との相談		留学生相談					
	B	有意 確率	B	有意 確率	B	有意 確率	B	有意 確率	B	有意 確率				
悩み (自分の性格)	.012	.026	-.011	.017	.527	-.019	.013	.155	.000	.004	.981	-.016	.013	.219
悩み (メンタルヘルス)	-.012	.035	.158	.023	.000	.093	.018	.000	-.003	.005	.454	-.013	.018	.462
悩み (学生同士の関係)	.021	.030	-.019	.019	.313	-.026	.015	.084	.002	.004	.681	-.008	.015	.577
悩み (部活やサークルなどの課外活動)	.028	.026	-.012	.017	.479	-.011	.013	.392	.001	.003	.778	-.038	.013	.004
悩み (アルバイト)	-.079	.028	-.050	.018	.006	-.016	.014	.256	-.008	.004	.036	-.021	.014	.131
悩み (教員との関係)	-.005	.090	.108	.058	.061	.031	.045	.491	-.006	.012	.616	.108	.045	.017
悩み (家族との関係)	.039	.042	.076	.027	.005	.011	.021	.620	-.005	.006	.355	.022	.021	.307
悩み (恋愛)	-.022	.026	.003	.017	.850	-.002	.013	.895	.001	.004	.735	-.019	.013	.154
悩み (授業、試験やレポート)	-.050	.028	.019	.018	.278	.014	.014	.333	.008	.004	.028	.024	.014	.083
悩み (研究や論文)	.171	.038	.021	.024	.378	-.010	.019	.585	-.003	.005	.600	.002	.019	.906
悩み (外国語の学習)	-.034	.033	-.024	.021	.261	.029	.017	.089	.003	.004	.532	.015	.017	.363
悩み (履修や単位)	.009	.030	-.044	.020	.026	-.003	.015	.822	-.007	.004	.070	-.027	.015	.075
悩み (休学、退学、転学部)	.000	.059	.043	.038	.264	.088	.030	.004	-.004	.008	.605	-.001	.030	.972
悩み (留学)	-.034	.041	.019	.026	.472	.017	.021	.424	.011	.005	.052	.134	.021	.000
悩み (進路や就職)	.124	.025	.015	.016	.351	.015	.013	.231	-.002	.003	.582	-.012	.013	.340
悩み (生活)	-.016	.036	-.047	.023	.044	.010	.018	.602	.006	.005	.236	.045	.018	.015
悩み (経済的な問題)	.052	.031	.023	.020	.247	.010	.016	.541	.013	.004	.002	.048	.016	.002
悩み (その他)	.042	.069	.033	.045	.452	-.007	.035	.845	.001	.009	.945	-.006	.035	.866
定数	.088	.026	.001	.048	.004	.017	.013	.203	.000	.003	.993	.044	.013	.001
Adjusted R2	.066		.089		.042		.009				.082			

2) 悩みの複雑性と内在性に踏み込んで

① 悩みの複雑性

これまでの分析は、学生が自分の悩みを認識していることを前提にするとともに、設問で提示されている悩みの項目を個別に処理して利用との関連を明らかにしようとしたものであった。しかしながら、個々の悩みは単独で存在しているものではなく、他の悩みと交差したり連鎖したりするものではないだろうか。また、学生自身が抱える問題や悩みを自覚していなかったり、自覚していてもそれを表出できていなかったりする場合はないのだろうか。以下ではまず、悩みのパターンを読み取る作業を行うとともに、悩みの複雑性を検討する。その後、悩みの内在性に踏み込んで考えてみる。

前の分析でも示したように、学生は、「自分の性格」、「メンタルヘルス」、「学生同士の関係」、「課外活動」、「アルバイト」、「教員との関係」、「家族との関係」、「恋愛」、「授業・試験・レポート」、「研究・論文」、「外国語の学習」、「履修・単位」、「休学・退学・転学部」、「留学」、「進路・就職」、「生活」、「経済的な問題」の中から過去1年に悩んだ内容項目すべてに答えるよう求められている。悩み同士の関連性や悩みの共通性やパターンを読み取るために、悩みの因子分析を行うとともにそれぞれの悩みの間に見られる相関性を見る。因子分析の結果を表5に、相関関係を添付表4に示している。

最尤法を用いた因子分析の結果6個の因子が抽出されている。まず因子1で浮かんでくる学生像は履修や単位、授業、試験、レポート、外国語の学習など学習関連で悩みを持つ学生である。因子2が示すのは学生同士の関係や自分の性格やメンタルヘルス、そして家族の関係などで悩みを持つ、人間関係に悩む学生であると思われる。相関表でみると、学生同士の関係や自分の性格について悩む学生は、他の多くの項目で悩みを持つ様子がうかがわれ、勉学の問題、部活の問題、経済的な問題にも悩む傾向にある。因子3は恋愛や部活、サークルなどで悩む学生であり、どちらかというとならば課外活動に積極的であり、「外向き」の悩みとも言えるだろうか。研究や論文、進路や就職、教員との関係で悩みを持つ因子4は、現在の勉学を将来へ結び付ける中で悩みを持つ学生像が浮かぶ。相関表でみると、進路や就職について悩みを持つ学生が他の悩みを持つのは、研究や論文に関してと、留学に関しての2項目のみである。メンタル領域での悩みをそれほど持たない傾向にあり、「前向き」な学生であると考えられる。因子5は生活、経済的な問題、アルバイトにおいて悩みを持つ学生であり、生活や学習を支える財政的基盤について問題を抱えているのであろう。最後に因子6に示される留学で悩みを持つ学生は、これのみにて高い数値を示している。相関表をみると、留学に悩む学生は外国語の学習やアルバイトで悩んでおり、就職や進路で悩む学生と同様、「前向き」な悩みの形態といえる。

このように因子分析で抽出されたパターン別悩みの分解はある程度妥当な結果を見せている。しかしながら、抽出後の負荷量平方和は23.991%と、パターン化による説明力は低い。一方添付表の相関を見ると非常に多くの有意度の高い相関が見られる。このことは、それぞれの悩みは交差したり連鎖したりする傾向にあるものの、その相互の関係を説明する規則性はそれほど高くはないことを示している。

表5 悩みの因子分析

	因子					
	1	2	3	4	5	6
悩み (履修や単位)	.591	-.048	.215	.027	.084	-.074
悩み (授業、試験やレポート)	.586	.135	.077	-.100	.020	.015
悩み (外国語の学習)	.397	.166	.083	.095	.034	.196
悩み (休学、退学、転学部)	.156	.131	-.021	.023	.083	.067
悩み (学生同士の関係)	.186	.577	.194	-.128	-.049	.117
悩み (自分の性格)	.091	.476	.150	.045	.042	.026
悩み (メンタルヘルス)	-.040	.414	.019	.203	.294	-.083
悩み (家族との関係)	.065	.250	.125	.206	.198	.051
悩み (恋愛)	.072	.141	.491	.066	.049	.078
悩み (部活やサークルなどの課外活動)	.180	.181	.410	-.145	.072	-.006
悩み (研究や論文)	.029	-.004	-.049	.427	-.001	.015
悩み (進路や就職)	-.054	.021	.073	.328	.051	.065
悩み (教員との関係)	.100	.167	-.062	.237	.114	.057
悩み (生活)	.267	.220	.034	.114	.422	-.051
悩み (経済的な問題)	.052	.005	.058	.082	.342	.087
悩み (アルバイト)	.200	.129	.187	-.249	.309	.221
悩み (その他)	-.062	.006	-.123	-.041	.140	-.055
悩み (留学)	.035	.045	.067	.112	.039	.533

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

抽出後の負荷量平方和：23.991

② 悩みの内在性について

悩みがある状況にありながら、その悩みを認識していない学生を、悩みを「内包」している学生と捉え、それらの学生は支援の必要性をどのように考えているのか検討する。

これまでの分析対象であった、悩みの質問に対して答えを返してきた学生は、自らの悩みを自覚している学生である。ここでは、悩みを持っていると訴えていないのに、危険指標を有する学生を探るために、同調査の中、大学生活や学習に問題を抱える様子を示唆する項目を抽出する。設問の中、a) 大学に来る回数、b) 日頃大学に行く時の感じ、c) 大学生活の目的、d) 授業および大学生活全体への不満、e) 生活のリズム について問うた項目がある。これらの回答の中、「大学に来たくない」、「大学に来るのがゆううつ」、「大学生活に目的がない」、「授業に不満である」、「大学生活全体に不満である」、「生活のリズムが不規則」などの6項目を悩みの“内在的指標”として、これらの徴候を示している学生が、支援を求めているか否かについて検討してみる。

ここでは特に、生活や学習に関する領域に焦点をあてるために、保健センターのカウンセリング、学生相談室の個人相談、クラス担任への相談を対象とし、それぞれの内在的指標を示す学生が、各支援の必要性をどのように感じているのかを見てみる。必要性の感じ方については、前の分析と同様「極めて必要である」もしくは「必要である」と答えた学生を「必要である」と認識している学生としてグルーピングし、「全く必要ではない」あるいは「あまり必要ではない」と答えた学生を「必要ではない」と感じる学生としてグルーピングしている。必要とされる場合を1、されない場合を0、とし

これを被説明変数とし、以下のモデルで回帰する。

$$P_i = F(Z_i) = \alpha + \beta \text{内在的指標}_{1 \sim 6, i} + \chi PC_i + \varepsilon_i$$

悩みの“内在的指標”についてはいずれも小さな値から大きな値になるにつれ、健全な指標を意味し、値が下がると危険度が増す。たとえば、「一週間に大学にくる回数」の場合だと、ほとんど無いが0、1回が1、7回が7、という値が置かれている。仮説としては、危険度が高ければ高い程学生支援の必要性を強く感じていることである。回帰の結果を表6に示す。

表6 悩みの内在指標と支援必要性の認識との関係

パラメータ	保健センターカウンセリング			学生相談室			クラス担任		
	推定値	標準誤差	有意確率	推定値	標準誤差	有意確率	推定値	標準誤差	有意確率
一週間のうち大学に来る回数	-.043	.041	.288	-.016	.037	.673	.051	.034	.130
大学へ行くときの気持ち	.076	.093	.410	.115	.086	.182	.158	.078	.043
大学生活の目的	-.087	.053	.101	-.096	.051	.059	.027	.048	.564
学生生活（授業内容）満足度	.074	.058	.204	.142	.054	.009	.094	.051	.065
大学生活全体への満足度	.076	.070	.276	-.037	.067	.576	-.113	.062	.067
生活リズム（規則性）	.047	.079	.554	.004	.075	.956	-.039	.067	.567
定数項	.653	.404	.106	.622	.391	.112	-1.225	.356	.001
χ^2	901.032			903.128			910.150		

危険度が高い程数値は下位になるよう設定されているため、係数が負の値であり、そして有意であれば仮説が支持されることになる。結果を見ると、どの支援においても総じて仮説を支持する結果は見られない。たとえば学生相談室の場合、大学に行く時の気持ち、大学における授業内容への満足度、生活リズムなどにおいて統計的に有意な値を含む正の関係が見られる。他の指標においては負の値を示しているものの、統計的な有意性は極めて低い。危険度の高い学生が必要性を認識せず、危険度が低い学生が支援の必要性を感じているのである。保健センターの場合を見ると、大学生活の満足度が高い人間、生活リズムが健全な人間、大学に行きたい、楽しみであると感じる学生の方がカウンセリングの必要性を意識している。クラス担任との相談の必要性についてはすべてにおいて有意な結果が出ていないが、こちらも危険指標を有する学生が相談を求めている傾向は見えない。

悩みの因子分析は、学生の悩みは a) 学習関連の悩み、b) 人間関係の悩み、c) 課外活動の悩み、d) 将来展望に伴う悩み、e) 経済的悩み、そして f) 留学に関する悩み、に大別されることがわかった。しかしこれらパターン化による説明力は低い一方、それぞれの悩みの間には非常に強い相関性が見られ、学生の悩みは交差したり連鎖したり複雑な様相を呈していることが確認された。また学生が自らあると訴える「悩み」ではなく、悩みの内在的指標として大学への不登校性、大学生活や授業における目的の不在、大学生活全体への不満、そして生活リズムの不規則性が支援を求める姿に結びついて

いるかを検討した結果、危険度の高い学生が支援を求める状況はうかがわれず、むしろ健全性の高い学生が支援の必要性を感じていることが示唆された。

4. まとめとして

本稿の分析で明らかになった要点をまとめると、

- ① 自分から悩みを有することを自覚しそれを示すことができている学生は、その悩みに対応する学生支援の必要性を感じ、またその支援を利用することができる。
- ② 学生が抱える悩みは勉学の問題からメンタルヘルス、留学の問題まである程度のパターンに分けられ得るものの、これらの悩みは複雑に交差しており、その表出の在り方も多様である。
- ③ 学生が自ら認識している悩みではなく、悩みの内在的指標を見た場合、危険度の低い学生は支援が必要であると認識している一方、危険度の高い学生は支援の必要性を感じていない傾向にある。

これらの結果から示唆されることは、支援を必要と感じ、利用する学生は対処法を自ら講ずることができる一方、悩みのサインを送ってはいるが、それに対処する支援を活用しようとの意識に達しない学生がいることである。真に問題を抱える学生は「見えにくい」のである。そしておそらく、より深い悩みを持ちそれを表出せず「埋もれていく」学生は、アンケートに回答することもないのであろう。

この問題に対応するならば、アンケートや学生相談の利用といった、学生が自ら意思表示をする「場」以外で、学生の問題を察知できる接点を持つことが必要となる。間接的接点でいえば、学生の成績の変動、単位の履修状況に関する情報を見守ることが必要であろう。事実、成績の変動が学生のリテンションを予測する強力な指標であることは複数の研究が実証している。一方、直接的接点としては、クラス担任やゼミ教員など学生と身近に接する機会が多い教員や、ピアサポートなどを通じた学生同士の交流である。分析からも分かったように、学修上の悩みと人間関係の悩み、そして金銭的な悩みを含め、悩みは相互に交差しており、悩みの存在がどのようなかたちで、いつ、誰に対して示されるかは、悩みが深ければ深いほど分かりにくい。教育の場、生活支援の場、課外交流の場、客観的情報収集の場のいずれかで示された「サイン」を受け止め、「場」同士の連携を密に保つことにより、敏速かつ適切な対応を講ずることが学生支援の新たな一歩であると考えられる。

参考文献

- Carranza, Carmy and Steven C. Ender. 2003. "Responding to Students' Needs." *Student Academic Services: An Integrated Approach*. Cramer, Gary L. eds. San Francisco: Jossey Bass.
- Cuseo, Joseph B. 2003. "Comprehensive Academic Support for Students During the First Year of College." *Student Academic Services: An Integrated Approach*. Cramer, Gary L. eds. San Francisco: Jossey Bass.
- 喜田裕子、高木茂子 2001. 「学生相談から見た大学生のメンタルヘルスと心の教育 - 富山国際大学における過去10年間のUPI調査をもとに-」『人文社会学部紀要(富山国際大学)』1、155-166頁。
- Kramer, Gary L. 2003. "Leading Student Academic Services in the Twenty-first Century." *Student Academic*

Services: An Integrated Approach. Cramer, Gary L. eds. San Francisco: Jossey Bass.

Stoecker, Judith 1988. "Persistence in Higher Education: A 9-Year Test of a Theoretical Model." *Journal of College Student Development*, V29 n3 p196-209.

谷島弘二 2005. 「大学生における大学の適応に関する検討」『人間科学研究（文教大学人間科学部）』27、19－27頁。

添付資料

添付表1 学生支援の利用状況

	キャリア 支援室	(%)	保健 センター	(%)	学生 相談室	(%)	クラス 担任	(%)	留学生 センター	(%)
知らなかった	167	17.8	255	27.2	221	23.6	265	28.3	443	47.2
知っているが利用 したことはない	443	47.2	556	59.3	640	68.2	639	68.1	416	44.3
あまり利用しない	174	18.6	67	7.1	38	4.1	27	2.9	21	2.2
時々利用する	129	13.8	46	4.9	23	2.5	2	.2	23	2.5
よく利用する	21	2.2	9	1.0	8	.9	0	.0	11	1.2
未解答	4	0.4	5	.5	8	.9	5	.5	24	2.6
計	938	100.0	938	100.0	938	100.0	938	100.0	938	100.0

添付表2 学生支援の必要性

	キャリア 支援室	(%)	保健 センター	(%)	学生 相談室	(%)	クラス 担任	(%)	留学生 センター	(%)
まったく必要でない	79	8.4	20	2.1	20	2.1	245	26.1	25	2.7
あまり必要でない	386	41.2	88	9.4	119	12.7	464	49.5	74	7.9
必要である	378	40.3	638	68.0	646	68.9	194	20.7	589	62.8
極めて必要である	83	8.8	186	19.8	146	15.6	28	3.0	238	25.4
未解答	12	1.3	6	.6	7	.7	7	.7	12	1.3
計	938	100.0	938	100.0	938	100.0	938	100.0	938	100.0

添付表3 悩みと支援利用との関係 (学生属性を含む)

	キャリア支援プログラム		保健コンサルティング		学生相談室 個人相談		クラス担任との相談		留学生相談						
	B	有意 確率	B	有意 確率	B	有意 確率	B	有意 確率	B	有意 確率					
悩み (自分の性格)	.019	.430	-.013	.017	.431	-.021	.013	.112	.000	.004	.922	-.015	.013	.269	
悩み (メンタルヘルス)	-.011	.033	.747	.153	.023	.000	.089	.018	.000	-.004	.005	.358	-.013	.018	.460
悩み (学生同士の関係)	.025	.028	.373	-.015	.019	.433	-.023	.015	.128	.002	.004	.700	-.010	.015	.528
悩み (部活やサークルなどの課外活動)	.033	.025	.186	-.010	.017	.574	-.009	.013	.499	.001	.004	.778	-.039	.013	.004
悩み (アルバイト)	-.025	.027	.344	-.043	.018	.018	-.015	.014	.283	-.007	.004	.070	-.014	.014	.338
悩み (教員との関係)	-.065	.084	.436	.100	.058	.086	.027	.046	.554	-.007	.012	.571	.095	.045	.035
悩み (家族との関係)	.038	.039	.327	.066	.027	.015	.003	.021	.893	-.007	.006	.240	.015	.021	.470
悩み (恋愛)	-.020	.025	.409	.000	.017	.989	-.005	.013	.716	.001	.004	.838	-.019	.013	.143
悩み (授業、試験やレポート)	-.020	.026	.441	.024	.018	.186	.017	.014	.241	.008	.004	.028	.026	.014	.060
悩み (研究や論文)	.079	.041	.055	-.008	.028	.764	-.031	.022	.158	-.003	.006	.656	-.005	.022	.816
悩み (外国語の学習)	-.005	.031	.875	-.017	.021	.428	.031	.017	.063	.004	.004	.349	.022	.017	.181
悩み (履修や単位)	.015	.028	.596	-.037	.020	.060	.000	.015	.993	-.007	.004	.108	-.026	.015	.095
悩み (休学、退学、転学部)	-.013	.055	.818	.046	.038	.231	.089	.030	.003	-.004	.008	.630	.000	.030	.993
悩み (留学)	-.001	.038	.982	.021	.026	.435	.019	.021	.366	.011	.006	.046	.138	.021	.000
悩み (進路や就職)	.039	.025	.124	-.008	.017	.650	.002	.014	.899	-.004	.004	.216	-.025	.014	.063
悩み (生活)	.009	.034	.784	-.039	.023	.092	.013	.018	.479	.006	.005	.226	.048	.018	.008
悩み (経済的な問題)	.037	.029	.197	.024	.020	.223	.012	.016	.457	.013	.004	.002	.047	.016	.003
悩み (その他)	.026	.064	.685	.028	.044	.529	-.011	.035	.753	-.001	.009	.917	-.011	.035	.758
経済学部	.003	.032	.922	.009	.022	.695	.029	.017	.091	-.002	.005	.596	-.010	.017	.563
法学部	-.023	.032	.472	.031	.022	.163	.037	.017	.034	.001	.005	.865	-.023	.017	.179
社会学部	.009	.031	.775	.039	.021	.061	.040	.017	.017	-.004	.004	.318	-.030	.016	.065
学部2年	.030	.030	.318	.012	.021	.548	.026	.016	.111	.007	.004	.127	.020	.016	.207
学部3年	.385	.034	.000	.045	.024	.057	.006	.019	.732	.008	.005	.122	.052	.019	.005
学部4年	.231	.041	.000	.063	.028	.023	.048	.022	.029	.004	.006	.476	.026	.022	.241
男	-.007	.024	.786	-.034	.017	.041	-.018	.013	.173	-.006	.003	.076	-.028	.013	.032
(定数)	-.020	.038	.603	.034	.026	.196	-.008	.021	.700	.002	.006	.665	.060	.021	.004
Adjusted R2	.199			.101			.052			.011			.093		

休学、退学、 転学部	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.037 .270 892	.070* .036 892	.138** .000 892	.059 .079 892	.076* .023 892	.090** .007 892	.038 .262 892	.027 .419 892	.085* .011 892	.037 .264 892	.081* .016 892	.103** .002 892	1.000 892	.057 .090 892	1.000 892	.086** .010 892	.000 .657 892	.108** .001 892	.048 .149 892	.024 .467 892
留学	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.062 .062 892	.017 .621 892	.079* .018 892	.016 .636 892	.135** .000 892	.063 .060 892	.100** .003 892	.093** .005 892	.030 .371 892	.036 .287 892	.148** .000 892	.005 .888 892	.057 .090 892	1.000 892	.086** .010 892	.015 .657 892	.015 .098 892	.055 .098 892	.055 .098 892	-.038 .251 892
進路や就職	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.024 .479 892	.084* .012 892	-.007 .829 892	.007 .841 892	-.054 .107 892	.060 .075 892	.074* .028 892	.034 .315 892	-.064 .058 892	.154** .000 892	.023 .499 892	-.013 .695 892	.000 .999 892	.086** .010 892	1.000 892	.085* .011 892	.059 .077 892	.059 .077 892	.059 .077 892	-.082* .014 892
生活	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.142** .000 892	.229** .000 892	.150** .000 892	.134** .000 892	.167** .000 892	.123** .000 892	.169** .000 892	.081* .015 892	.190** .000 892	.042 .213 892	.182** .000 892	.185** .000 892	.108** .001 892	.015 .657 892	.085* .011 892	1.000 .000 892	.188** .000 892	1.000 .000 892	.188** .000 892	.049 .145 892
経済的な問 題	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.039 .241 892	.087** .010 892	.016 .627 892	.021 .536 892	.141** .000 892	.077* .021 892	.100** .003 892	.065 .054 892	.012 .728 892	.026 .440 892	.073* .029 892	.069* .038 892	.048 .149 892	.055 .098 892	.059 .077 892	.188** .000 892	.059 .077 892	.188** .000 892	1.000 .000 892	-.023 .496 892
その他	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	-.030 .375 892	.026 .440 892	-.054 .110 892	-.030 .368 892	.009 .785 892	.022 .513 892	.068* .043 892	-.065 .054 892	-.072* .031 892	-.008 .805 892	-.020 .551 892	-.045 .176 892	.024 .467 892	-.038 .251 892	-.082* .014 892	.049 .145 892	-.023 .496 892	-.023 .496 892	1.000 892	1.000 892

**：相関係数は1%水準で有意(両側)。*：相関係数は5%水準で有意(両側)。